

V. 特記事項

1. 附属病院での教育機会の拡大と充実

本学は、より質の高い医療人養成に加え、臨床系研究の推進、臨床系教員の臨床研修等への活用を目的とし、平成 25 (2013) 年に、単科の薬科大学としては全国で初めての大学附属病院を設置している。その後、医学部の開設に伴い、平成 28 (2016) 年 4 月からは医師養成を行う医育機関としての任務が附属病院に加わった。令和元年 (2019 年) 10 月からは、医学部医学科の 1 期生 (4 年次学生) が、附属病院において診療科臨床実習を開始しており、教員の指導のもと医療チームの一員として外来や入院患者の診療に従事している。

一方、平成 29 年 3 月 24 日、本学は、宮城大学との間で相互の教育・研究効果を高めることを目的とした包括的な連携協定を締結した。この協定のもと、チーム医療の重要性を理解してもらうための IPE (Inter Professional Education, 専門職連携教育) が、本学附属病院において薬学部実習生と看護学部実習生と共同で行われている。医学部は、令和元 (2019) 年度から初めての臨床実習がスタートしたばかりであるため、現段階で医学部生は IPE に加わってはいない。しかし、新病院棟の完成を含め医学部・薬学部の学生が共同で学ぶ環境が整備されつつあり、医・薬、さらには医・薬・看の連携による IPE の今後の推進が期待される。さらに、昨年度策定した中長期計画では、薬学部生命薬科学科の学生を対象に、治験コーディネーターやモニター等の治験担当者の育成に、附属病院を活用することを検討しており、今まで以上に、教育の場としての附属病院の重要性が増すものと考えている。

2. 地域医療への貢献

東北地方では今後、高齢化・過疎化とそれに伴う地域コミュニティの崩壊が一段と進むことが予想され、このような特性をもつ地域での医療の在り方やニーズに応じていく必要がある。

本学では、地域の医療機関からの医師派遣 (診療応援) の要請を受付ける組織として「地域医療総合支援センター」を設置し、窓口を一本化して運営している。

窓口の一本化により、医師派遣の要望に対しては、診療科間の調整を円滑に行うことができ、可能な限り医師の派遣に努めている。派遣するための医師についても、医学部教員 (医師) 数の増員に伴って増加傾向にあり、地域医療における貢献度も徐々に増しているものとする。

高齢化が急速に進む中、地域住民を対象とした健康に関する啓蒙活動として、定期的に市民公開講座や健康講話など、地域の健康増進に資するイベントを開催している。

また、医学部の学部教育においても、全教育期間を通じ、東北 6 県の計 19 病院 (「地域医療ネットワーク病院」) の協力を得て、同じ地域を訪問、滞在しながら学習する地域滞在型の地域医療教育を行うことにより、地域社会の理解を深めるとともに、医師としての使命感を醸成しており、将来的な地域医療の担い手として、卒業生 (医師) が地域に定着することを旨とした教育を行っている。